一二六三年 Baybars に據つて築造されたものが始めて十字型をなす事を說いて居る等、單なる解說叙述には止まらないで專門的見解の片鱗が隨所に現はれて居る。

要するに、埃及に於ける古來の文化、卽ちファラオ、アレクサンドリヤ、基督敎、回敎の四個の文化に表はれた美術を通觀する一般的著作として恰好のものと考へらる。(Studio Ltd. London 1931)(岡島)

ソコロフスキー著 內田寬一譯西藏探檢祕史

本書はロシア國立地學協會幹事ソコロフスキー氏(G. N. Sokolovsky)が同協會機關雜誌第六十卷第一冊に掲載した『中央アジア探檢史の中から』『敎父フランシスコ=デ=アゼウェドの旅行』の飜譯にして、ロシヤ人バイカロフ氏の助を藉られて成り、其の探檢の主要な地域が西藏を中心とし、且つ其の探檢の結果が未だ廣く世に知られてゐなかつたところから、便宜上題して西藏探檢祕史と名づけ出されたものである。

蓋し世界探檢史上於けるゼスキット敎宣敎師達の貢獻は偉大なるものがあつたが、世界最大大陸たるアジア洲の未だ知られざりし內陸部も亦傳道を志しつゝ彼等の探檢を行つた領域であつたのであつて、彼等の齎した結果は歷史地理學上價値ある材料となつてゐる。從つて彼等の提供した材料も次第に研究されつゝあつたのであるが、爰にまた久しく未着手のまゝになつてゐたポルトガルの宣敎師アゼウェド氏の探檢の結果が明にされ、それによつて中央探檢史の貴重なる資料を得たのみならず、第十七世紀頃の該地方の狀態も推察されるのであつて、早速其の邦譯書を得たことは我等の最も喜とするところである。

本書は先づ史上に於けるアゼウェド氏の位置と其の西藏探檢の意義を解明し、次にアゼウェド氏のアグラから西藏に到る行程に於ける熱心な觀察によつて見聞したる自然の狀態並に住民の風俗習慣やさては遭遇したる危難に就いても述べ、次に斷片的乍ら西藏の宗敎・政治・商業の事情及び風習を明にし、次にツァラバンに於ける宣敎の成功すべくもなきを察し困難なる旅を續けてラダーク

に至る途中經驗觀察したるもの並にラダークからアグラへの歸還に見聞せる處を叙述してゐる。

此の譯文は嘗て地理教育第十卷第四號より第十一卷第二號に亙つて連載されたことがあるが、本書にては各章を更に數節に分つて各々に標題を附し、尚ほアゼウェド氏の探檢行程表並に略圖及び地名索引を添加し閲讀に便してゐる。四六判一〇四頁の小冊子であるが、興味深き幾多の材料が盛られてゐる。(中興館發行定價九拾錢)(村松)

●國民世界地理　上下　藤田元春著

近時に於ける地理風俗大系乃至地理大系の如き寫眞を主とする地理書の續刊は我が國地理學の發達普及の上より喜ばしきことであつたが、それが半ば通俗書であつただけそれだけ物足りぬ感を抱かしめた。然るに此處に讀んで興味あるばかりでなく學術的な薫の高き國民世界地理上下二卷を得たことは吾人の眞に欣快とする處である

本書は其の大綱をブルッグス氏の世界地理書により、上卷の自然の環境の如きブルックス氏のそれのまゝであるが、第二篇以下各洲地誌はグルビング、ブラーシュの世界地理書等を參照し順序の如きも著者の方寸に出てゐる。中に就いてアジア洲の部特に支那に於ては著者の蘊蓄の一斑が表れてゐる。蓋し外國書による世界地誌の多くは原著者の故國に徒らに詳しくアジア洲は概して粗雜なりし嫌があつたが、爰にアジア洲を詳說する纒つた世界地誌を始めて得たと云ふべきである。

本書上卷に於て先づ地球上を地理區の型式に分ち、次いでアジア洲、アフリカ洲、大洋洲を詳說し、下卷にヨーロッパ洲、北アメリカ洲、南アメリカ洲を收めてゐる。卷中多數の寫眞地圖カット表等を用いて直接目に訴へて了解に便にし且兩卷末に索引を附してゐる。

世界の現勢に關する正しい認識を得る爲に廣く一般の讀者に推奬したいと思ふのであるが、中にも地理學を專攻せずして中等諸學校に地理を講ぜらるゝ方々の恰好の參考書であることを、かうした質問を屢々受けるから附記しておく。(富山房發行　四六判上四七〇頁　下五七

三頁、定價各貳圓貳拾錢)(村松)

●一神論卷第三　序聽迷詩所經一卷

東方文化學院京都研究所編

本書は東方文化學院京都研究所の古書複製事業の一として景教經典にして我國に存する處の二經、卽大正六年故富岡桃華氏の藏に歸したる一神論卷第三及び高楠順次郎博士所藏の序聽迷詩所經一卷を複製影印したものである。元來基督教の一派たるネストル教が唐代支那に於て景教として大に流行したのは明白な史實であるにも不拘古來その經典が全く堙滅して傳らなかつたが爲に、景典の內容形式は勿論、支那に於けるその教義の如きも不明たるを免れなかつたのであつた。然るにかの近年數次に亘つて行はれた中央亞細亞の探檢は遂に敦煌石室遺書の發見となり、景典にあつては大秦景教三威蒙度讚、一神論、序聽迷詩所經、志玄安樂經、宣元至本經の五が見出されたのである。その諸經典の形式內容に就ては既に屢次羽田博士によつて藝文、東洋學報、內藤博士還曆祝賀支那學論叢等に於て紹介發表せられ、化史の貴重なる資料として是等諸景典の複製は學界一般の要望する處となつたが而もなほ景教三威蒙度讚を除くの外は一として影印に附せられるに至らなかつた。

本書がかゝる際に、東方文化學院京都研究所によつて公刊せられたる所以、意義は今更喋々する迄もあるまい。印刷(コロタイプ)亦極めて鮮明である。鳥の子美濃倍版の唐本仕立で帙に收められてゐる。

尙附するに羽田博士の剴切なる解說を以てし、兩經の要旨を擧げ且その撰述は一神論は貞觀十五年、序聽迷詩所經亦景教傳來の初期に在り共に西方景士の手に成れるを論じ、經中に見出される處の聖書の語句、ソグド語の對音等を指摘せられてゐる。

啻に支那史東洋史の專門家に止らず、苟も宗教史、東洋文化に關心ある人士必備の書として薦める。(彙文堂、丸善發賣、實價五圓)(內田)

●天正遣歐使節記　文學博士　濱田靑陵著

切支丹の名は夢を、詩を、憧憬を與へる。一面には中